

モジュール7

虐待を聴く技術 コミュニケーションの技法

【学校でできること②】

虐待を疑ったら

～対応の前提～

○ 学校には確証を探す義務はない

～ 2つのエラーのどちらを許容するか

虐待を見過ごすエラー ↔ 虐待と誤認するエラー

※ わが国の虐待防止制度は、「見過ごすエラー」をなくすことに主眼

※ 見すごさないための対応が、結果的に「誤認」となっても許容される

○ 単発的な子どもの言動からだけでなく、日常の観察と合わせての判断が必要

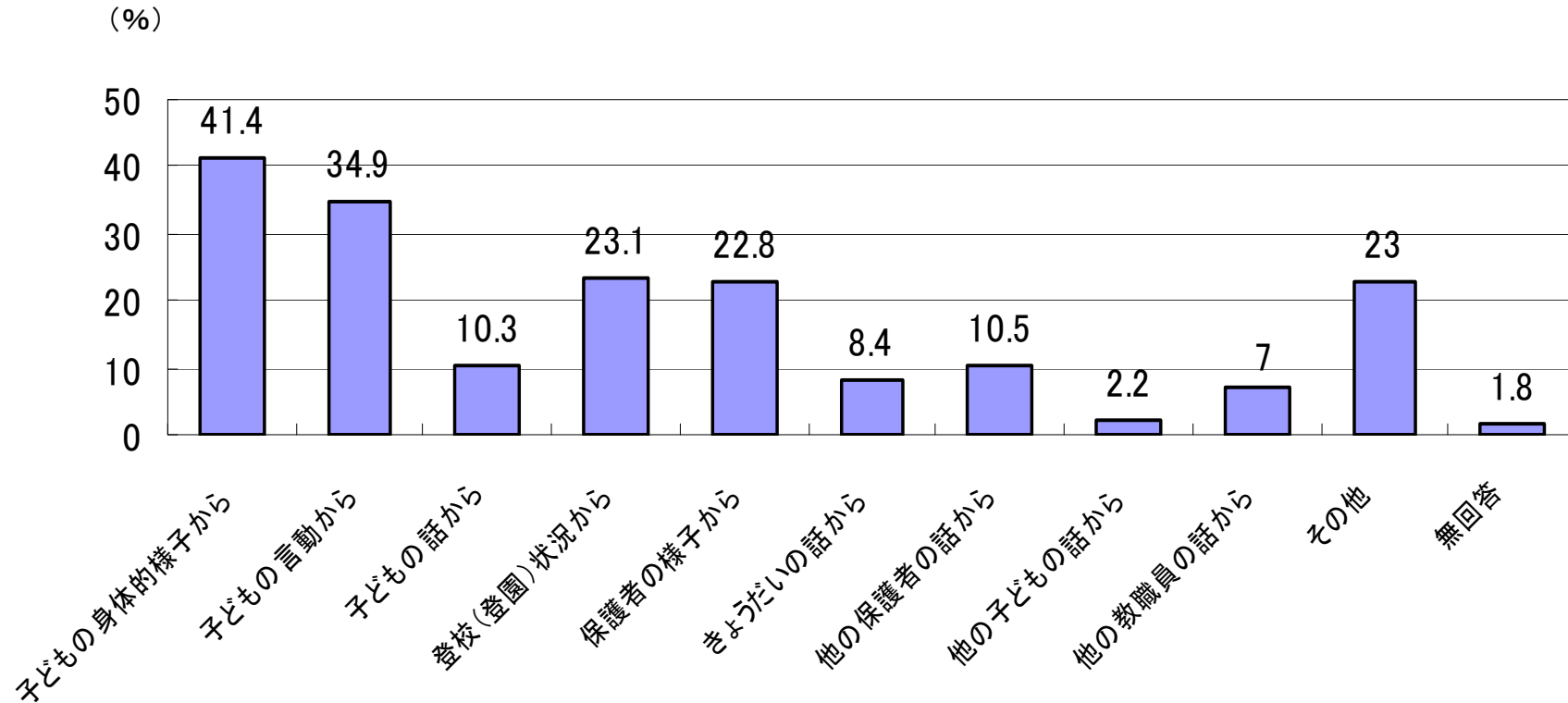
○ 子どもからの聴き取りの際は、誘導にならないよう配慮が必要

※ 子どもが教職員の質問に「わからない」と言えるかどうかを考慮

※ 子どもの言語発達・概念理解の水準にも配慮

虐待を把握した経緯

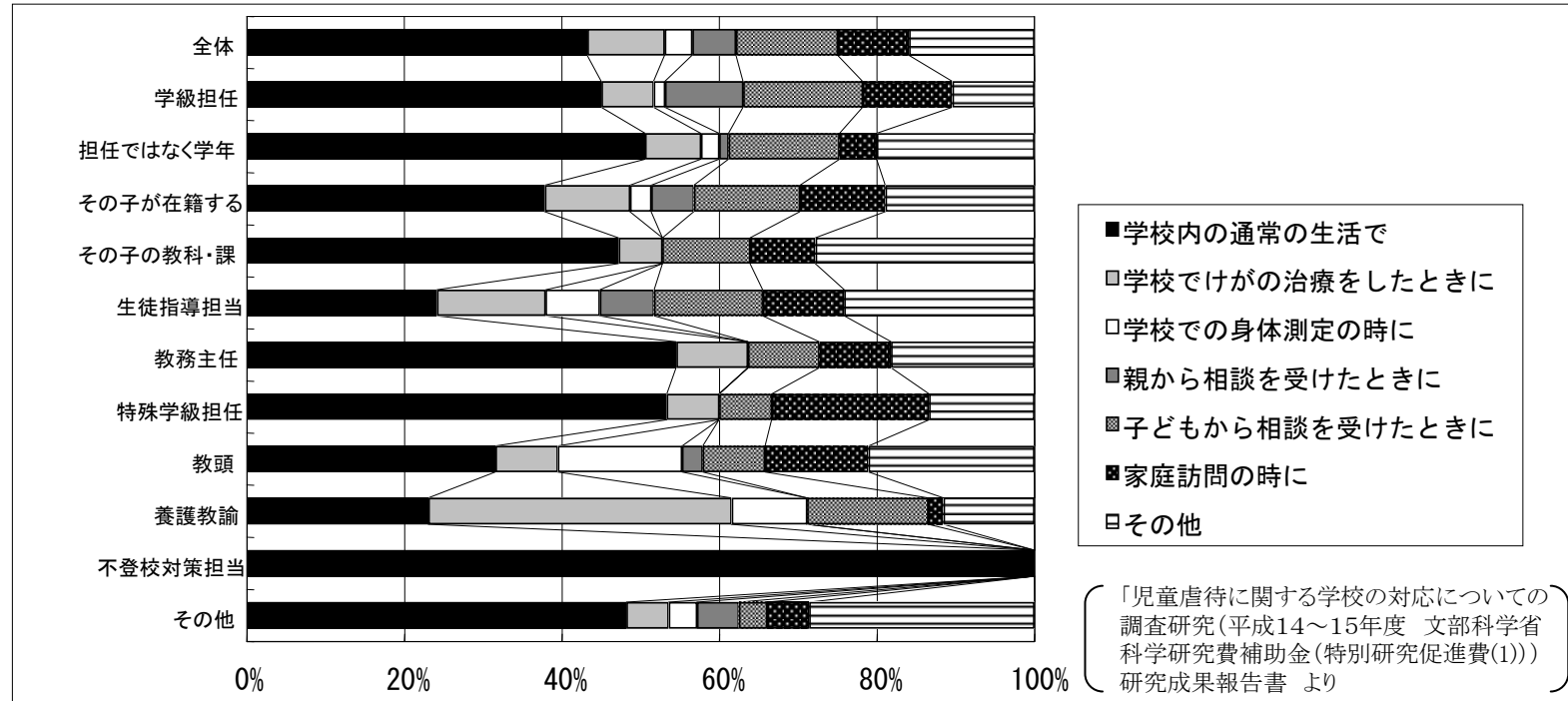
どのような経緯で把握されましたか



〔 保育所、学校等関係機関における虐待対応のあり方に関する調査研究
(厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究)平成17年度総括研究報告書より 〕

虐待を疑う視点 ～職務ごとの違い～

○ 虐待を疑った時【職務別】



○ 学校で虐待が疑われる場合、担任は子どもの言動から気づくことが多く、生徒指導主事は他の教職員からの情報が集まる結果として疑い、養護教諭は子どもの身体的な状態から疑うことが多い。

○ 学校には、複眼的視点を持つことができる可能性がある。

- 複数の教職員による情報の共有と吟味がきわめて大切。
- 実質的な協議のできる場が必要。
- それぞれの職務分掌に応じた研修内容が望ましい。

気付いてからの情報収集

- チームを組んで子どもの様子、保護者の様子について情報を集め、状況判断をする
 - 一人の判断は自信がなく、歪みやすい
 - 養護教諭、スクールカウンセラーなど教室以外の場で第三者的にかかわる大人の情報を大切にする
 - 先入観をできるだけ排除して、あらゆる可能性を探索する
 - 犯人捜しの視点にならないように、互いに注意し合う
 - 専門・補助スタッフとの情報共有のための協議の持ち方、伝達のやり方等にも配慮する

聴き出すときの配慮

- 落ち着いて話せる場所で話す
- 「誰にも言わないから」、「親には言わないから」という約束はしない
 - 「みんなの知恵を借りよう」と、根気強く子どもを説得する

性的虐待の場合

- 性的虐待の聴取はとても困難な課題
 - 聴いた大人が驚き、過剰に反応してしまうと、次からは話さなくなる
 - 一度認めたものを「二度目」は否定することもしばしば

- 純粹な虚言として性的虐待が登場することは、ほとんどない
 - ※ 性的虐待に絡む内容を子どもが訴えてきたときは、その家庭のどこかに性的な規範の歪みがあると考えてしかるべき

- 早い段階で、関係機関との連携・専門機関からの助言を

質問の種類

○ 質問にはいろいろな種類があり、それぞれ子どもに与える効果が異なる

- 漠然とした質問・開かれた質問
- 特定された質問
- 選択肢のある質問
- 誘導的質問
- 強制

【質問の種類】

① 漠然とした質問・開かれた質問

- 「はい／いいえ」では答えられないような形式の質問
(5W1Hの質問)
- 子どもに主導権を与える質問
- 子どもにすれば答える手がかりがいちばん少ないタイプの質問
- 返ってくる答えの信頼性はいちばん高い質問

※ 「なぜ(Why)?」という質問は、虐待を受けた子どもには答えられない

【質問の種類】

②特定された質問

- 「はい／いいえ」で答えられる形式の質問
- 状況や感情、出来事の順序などをより詳細に確認するための質問

※ 漠然とした質問・開かれた質問に子どもが何か答えてきたら、特定された質問でより深く聴いていく

※ 特定された質問ばかりを続けて行うことはしない

～ 特定された質問の連続は誘導になる

～ 特定された質問の後は、できるだけ、漠然とした質問・開かれた質問に戻るように

【質問の種類】

③ 選択肢のある質問

- 質問の後に、さらに選択肢を添える形式で行う質問

〈例〉「このケガは誰にやられたの？ お父さん？ それともお母さん？」

※ 漠然とした質問にはなかなか答えられない場合に有効

※ 選択肢は子どもに答える手がかりを与えるが、答えの範囲を質問者の側で決めてしまうことにもなる

※ 「○○なの？、違うの？ (A or not)」という質問は、受け手にとっては、事実上の特定された質問になる

※ 選択肢を示したあとで「それとも他の人(もの、こと)？」「それとも両方かな？」と付け加えることも有効

※ 選択肢を子どもが選んだら、漠然とした質問へ

【質問の種類】

④誘導的質問・強制

※ 子どもの答えの信頼性を下げるので基本的には避けた方がよいタイプの質問

誘導的質問

〈例〉「お母さんが叩いたんでしょ？」

強制

〈例〉「答えてくれるまでは教室に戻らなくていいです」

話を聴く態度等

- 子どもの言語能力に配慮して聴く
- 子どもは、理解できていないことばでも、「見よう見まね」のように使うことがあるので、注意する
- 答えは根気よく待つ
- 一度は認めた内容の話を、次の機会には認めなくなったような場合にも、ていねいに事情を聴く
 - ※ 強引に認めさせるようなことは避ける
- 記録の取り方はケースバイケースだが、大切なのは子どもの話を傾聴している態度を貫くこと

記録の重要性と記録に当たっての留意点

○ チーム対応を進める上でも記録は重要

※ 事実と推論は明確に書き分ける

※ けがなどは、スケッチで記録する

○ 家庭訪問の記録には特に難しさがある

～ 密室的な作業となる家庭訪問の記録では、訪問した者にとって意味がないと判断されたことからは、記録されないままに終わることが多い。

→ 事実の経過を細かく記録する